

図書館だより

2024年度 第5号

企画展示

図書委員が選ぶ 旅する本

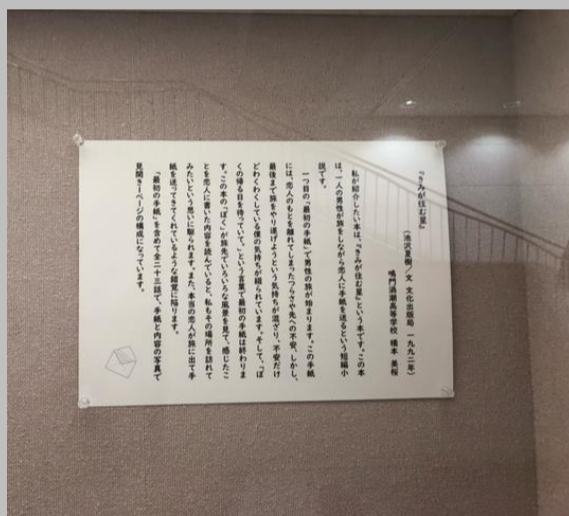
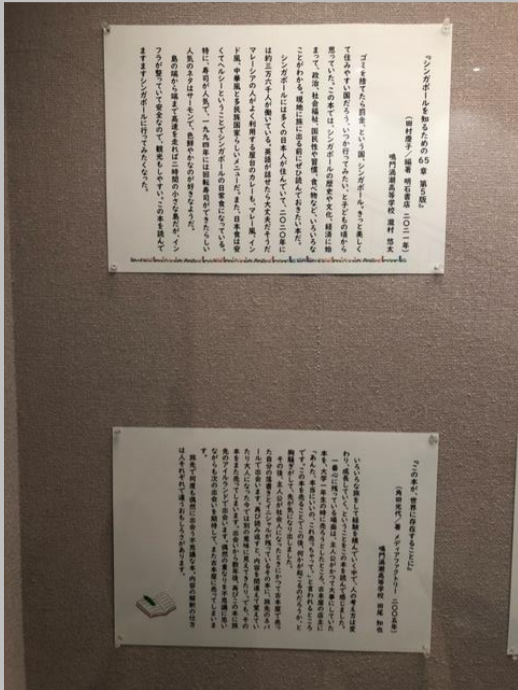
徳島県立図書館にて
9月16日まで開催中

徳島県立図書館企画展示「図書委員が選ぶ旅する本」が現在開催中です。

この企画展示では、県下の高等学校図書委員が応募した「旅する本」の紹介文が本とともに展示されています。

本校からは3人の図書委員が参加、展示されています。下に紹介文を掲載します。

文化の森総合公園にある県立図書館の1階ギャラリーにて、展示期間は9月16日（月）まで。ぜひご覧ください。



紹介文

『シンガポールを知るための65章 第5版』

3年 図書委員
田村慶子／編著明石書店

ゴミを捨てたら罰金、という国、シンガポール。きっと美しく住みやすい国だろう、いつか行ってみたい、と子どもの頃から思っていた。この本では、シンガポールの歴史や文化、経済に始まって、政治、社会福祉、国民性や習慣、食べ物など、いろいろなことがわかる。現地に旅に出る前にぜひ読んでおきたい本だ。

シンガポールには多くの日本人が住んでいて、2020年には約36,000人が働いている。英語が話せたら大丈夫だそう。マレーシアの人がよく利用する屋台のカレーも、マレー風、インド風、中華風と多民族国家らしいメニューだ。また、日本食は安くヘルシーということでシンガポールの日常食になっている。特に、寿司が人気で、1994年には回転寿司ができたらしい。人気のネタはサーモンで、色鮮やかなのが好きなのだ。

島の端から端まで高速を走れば2時間の小さな島だが、インフラが整っていて安全なので、観光もしやすい。この本を読んで、ますますシンガポールに行ってみたくなった。

『この本が、世界に存在することに』

3年 図書委員
角田光代／著メディアファクトリー

いろいろな旅をして経験を積んでいく中で、人の考え方は変わり、成長していく、ということがこの本を読んで感じました。1番心に残っている場面は、主人公がかつて大事にしていた本を、大学1年生の時に売ろうとしたところ、古本屋の店主に「あんた、本当にいいの、これ売っちゃって。」と言われるところです。この本を売ってこの後、何かが起こるのだろうか、と胸騒ぎがして、先が気になり出しました。

その後、主人公が社会人になったときにかつて古本屋で売った自分の落書きとインシヤルが残っているその本に、旅先のネパールで出会います。再び読み返すと、内容を間違えて覚えていたり大人になった今では別の意味に見えてきたり。でも、その本をまた売ってしまいます。出会いから数年後、再びこの本に旅先のアイルランドで出会います。偶然の重なりを不思議に思いながらも次の出会いを期待して、また古本屋に売ってしまいます。

旅先で何度も偶然に出会う不思議な本。内容の解釈の仕方は人それぞれで違うおもしろさがあります。

『きみが住む星』

3年 図書委員
池沢夏樹／文化出版局

私が紹介したい本は、『きみが住む星』という本です。この本は、1人の男性が旅をしながら恋人に手紙を送るという短編小説です。

1つ目の「最初の手紙」で男性の旅が始まります。この手紙には、恋人のもとを離れてしまったつらさや先への不安、しかし、最後まで旅をやり遂げようという気持ちが混ざり、不安だけワクワクしている僕の気持ちが綴られています。そして、「ぼくの帰る日を待っていて。」という言葉で最初の手紙は終わります。この本の「ぼく」が旅先でいろいろな風景を見て、感じたことを恋人に書いた内容を読んでいると、私もその場所を訪れてみたいという思いに駆られます。また、本当の恋人が旅に出て手紙を送ってきてくれているような錯覚に陥ります。

「最初の手紙」を含めて全23話で、手紙と内容の写真で見開き1ページの構成になっています。